OISO MUNICIPAL MUSEUM

Report リポート

大磯町郷土資料館だより
1996・10・15
14

もくじ

◇馬場台遺跡の炭化米分析 2
◇金次郎像の不思議 4
◇海と山と人と③ 8
◇錦絵「大磯禱龍館之図」と尾上菊五郎 9
◇秋季特別展 10
◇トピックス 11
◇資料受入／行事案内 12

資料の分析記録

平成７年度中に、当館では館蔵の考古資料の分析を行ないました。対象とした資料は、大磯町町内に所在する馬場台遺跡28地点出土の炭化米です。炭化米の分析は静岡大学農学部の佐藤洋一郎先生にお願いし、貴重な成果を得ることが出来、今回分析結果の概要に就いて玉稿を寄せていただきました。

馬場台遺跡は、大磯町国府本郷から生沢にかけて存在し、弥生時代から中近世にいたる大複合遺跡です。平安時代末に国府が所在したとされる推定地を包括しており、国府関連の遺跡として広く知られています。

馬場台遺跡は現在まで、30箇所以上の地点で調査が行なわれています。1993年に発掘調査を行なった28地点は僅かな調査面積でしたが、弥生時代中期宮ノ台期の住居址１軒が検出されました。相模川以西の神奈川県内では類例が少なく殊に大磯町域においては初出の事例でありました。住居址は火災に遭ったとみられ、多量の炭化材がみられました。また、壺・甕等の土器の他、石器・骨角器等多様な遺物が一括廃棄の状態で出土し、遺物群に伴って米と思しき炭化物が床面直上から塊の状態で検出されました。

馬場台遺跡の炭化米分析

静岡大学農学部助教授　佐藤洋一郎

日本で稲が渡来してから2000年以上の時がたつ。日本に渡来した稲は多くがジャポニカであったと考えられているが（佐藤　1996)、その直後の証拠はまだない。また、ジャポニカには温帯ジャポニカと熱帯ジャポニカの２つが知られるが、それらがいつどこから来たか、また渡来後、どのような経路を経て伝播したかについてもよく分かってはいない。さらに、厳密に言うと、当時渡来した稲が、現在日本で栽培されている稲の直後の祖先かどうかも不明である。

これら未解決の問題に答えるには、各時代、各地の遺跡から出土する稲の遺存体からＤＮＡを取るなどして、遺存体自身の生物的情報を得る必要がある。そのためには低湿地などから出土する保存状態のよい遺存体を手に入れなければならないが、稲の場合、低湿地などの遺存体はあまり知られて来なかった。一方住居跡の床面や土器などからは炭化した種子（炭化米）が大量に出土しているので、炭化米のＤＮＡ分析が可能になるなら上のような疑問を解く格好の素材となる。そこで私たちの研究グループでは数年前から炭化した稲種子のＤＮＡ分析法の開発に当たってきた。その結果、今では、保存状態のよい炭化米ならＤＮＡが取り出せ、不十分ながらも分析できるようになってきた。

今回分析を行った炭化米が出土した馬場台遺跡は、関東にある弥生時代の遺跡として注目される。しかも多量の稲種子が出土しており、その稲の系譜について興味がもたれた。つまり、それらが九州に渡来した稲の直接の子孫かどうか、また最近まで同地にあった古い品種の祖先かどうかが興味を引くところである。同地は太平洋に面するので、あるいは九州に達した稲とは違った系譜に属するものが渡来してきた可能性もあったからである。そこで私は、出土した炭化米17粒を対象とし、それらからＤＮＡをとり分析することで、付近の当時の稲がどのような稲であったのかの推定を試みた。

分析の手法の概要と結果は以下のようである。

ＤＮＡを取り出す手法（抽出法）は、私たちの研究グループの定法によった。これは、サンプルを液体窒素でこなごなに砕き、ついで界面活性剤（洗剤に入っている泡の主成分）はじめ各種の薬品と遠心分離の操作でタンパク質、糖、脂肪などを取り除く方法である。取り出されたＤＮＡの総量は種子１粒あたりで１ｇの10億分の１以下という微量のため、ＰＣＲ法という方法によって増幅させた。ＰＣＲ法とは、ＤＮＡに備わる自己複製能力を利用して、微量のＤＮＡを増やす方法で、もとのＤＮＡが微量であればあるほど、その威力が発揮される。ＤＮＡを増やす時、稲の品種の特性をよくあらわす部分だけを増幅させることで、その稲がどのような稲であったかを知ることができる。最後に、増幅されたＤＮＡが真に炭化米のものであることを確認する実験を行って一連の操作が完了する。この最後の実験は、炭化米が長く土中に留まっている間に微生物などに汚染され、あやまってその微生物のＤＮＡが増幅される危険性を考えてのことである。なお、今では炭化米１粒からＤＮＡを取り出すことができるようになっている。

このようにして取り出されたＤＮＡを分析することで、以下のことが明らかとなった。

まず、17粒の炭化米のうち、実際にＤＮＡが生きていて増幅されたのは11粒であった。残り６粒からは、ＤＮＡが増幅できなかったが、それは出土炭化米が火

住居址全景

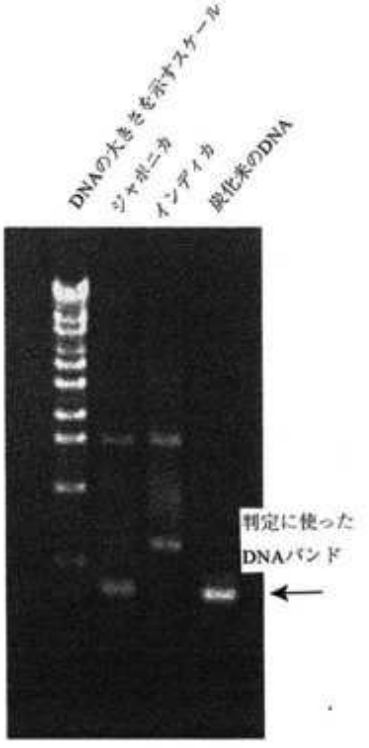
炭化米出土状況

事で焼け落ちたと思われる家屋から出土しており、火災によって火を受けたためかも知れない。(DNAは火とアルカリに弱い)。火を受けた遺物からのDNA分析には困難が予想される。

残り11粒の炭化米はすべてジャポニカ品種だけがもつDNAの構造を持っていた。その例は右図のようで炭化米から得られたDNAのパターンは現在のコシヒカリにはよく似ているが、インディカのそれとは明らかに異なる。11粒のすべてについて、複数のDNAの部分がジャポニカに固有のパターンを示したことから、この11粒がジャポニカに属していたことは間違いないと思われる。断定的なことは言えないが、弥生時代の大磯にあった米は、そのほとんどがジャポニカであったことは確かであろう。私が今までに分析した九州や東海地方の炭化米も、その大多数がジャポニカに属するものであった。当時の大磯の稲が、九州に渡来した稲の末裔であることを疑わせる材料は出てこなかったことになる。

ただ、とれたDNA量が少なかったために、それがどのようなジャポニカであるか、つまり焼畑で栽培されていたような熱帯ジャポニカに属するのか、水田稲作に適応する温帯ジャポニカであったのかは確認できていない。今後はこうした点についても分析を進めてみたいと思っている。

古代の植生や栽培されていた作物、品種の推定には従来、花粉分析、プラントオパール分析などが用いられてきた。DNA分析はこれからの需要が見込まれる分析であるが、従来の方法に比べて、一層細かい違いを検出する能力を持っている。特に、品種や個体レベルでの違いを検出する唯一の方法である。たとえば、2つの丸木舟が同じ材からとられたものかどうか、と



いった疑問に答えることは、DNA分析法以外では不可能である。考古遺跡から出土する炭化米からDNAが取り出されるなら、古代の稲の姿の正確な復元にとって、またとない方法であるといえよう。

謝辞：本分析にあたっては、(有) 遺伝資源研究所のご助力、ご支援を頂きました。記して謝意を表します。

参考文献

佐藤洋一郎(1996)：DNAが語る稲作文明、NHKブックス、東京、227ページ

講義記録

平成８年度の子ども歴史教室が、去る８月７日（水）、８日（木）の２日間行なわれました。今回は「ザ・きんじろう」と題して、二宮金次郎をとりあげました。１日目は報徳博物館学芸員の木龍克己氏から『金次郎像の不思議』と題して講義をしていただき、２日目には同学芸員の案内で小田原市内の金次郎ゆかりの地を見学しました。折しも「学校の怪談２」という映画が公開されており、その中にも金次郎像が登場するなど、意外な方面から子どもたちに知られている金次郎ですが、今回の教室はますます身近に感じる契機となったことでしょう。そこで、本紙上では１日目の講義内容をまとめました。

金次郎像の不思議

報徳博物館学芸員　木　龍　克　己

金次郎像で連想されるのは、薪を背負って本を読んでいる少年像（負薪読書）ではないでしょうか。それには、様々な材質のものや、負薪読書以外の金次郎像（銅像）もあります。

しかし、普通、銅像はその人物が立派な人であった場合、後の人々がその人物を称えるために建てられるのがほとんどですが、この像は子どもを用いています。金次郎は大人になって何もしなかったのでしょうか‥‥そうではありません。なぜ少年像となったのでしょうか。その理由について、金次郎と小学校の関係からみていきましょう。

明治に入ってから学校が建てられましたが、当初は子どもを学校へ出すということがあまり理解されませんでした。国民の大半が農家で、子どもは貴重な労働力ですから、学校へ行かせるより家の手伝いを、ということになります。

政府は、子どもの就学率を上げさせるため、歴史上の人物を利用して、理解を得ようとしました。しかし、最初に取り上げた人物は、武士などでしたから、農民にとっては、いまひとつ理解されませんでした。そこで、農民出身でありながら、後には幕府の役人にもなった金次郎が選ばれたのです。農民でも、がんばれば立派な人物になれる見本を示したのです。しかし、為政者にとって不都合なところ（青年時代以降）は、カットされてしまったのです。したがって、教科書には、少年時代の話ばかりになってしまい、それがのちの金次郎像のもとになったのです。

そのあたりを知るために、金次郎とはどういう人物であったか、明治43（1910）年の『尋常小学校修身書巻二児童用』を参考に見ていきたいと思います。

生い立ちと教科書

金次郎は天明７（1787）年に父利右衛門、母よしの長男として中級クラスの農家に生まれました。父は困っている人に金や米を貸し与えたので、「栢山の善人」と呼ばれていました。ところが、その後酒匂川の氾濫などで田畑が砂礫となってしまいました。元々、体が丈夫でなかった利右衛門は、田畑の復旧などいろいろな心労が重なり、金次郎が14歳の時に亡くなりました。残された母と金次郎・友吉・富次郎の苦労話は、この頃からのものです。金次郎が16歳の時には母も亡くなり、兄弟は親戚へ別々に引き取られていったのです。

この頃の様子を示した修身書が図１です。これには１～７番までに分かれて書かれています。

１番目の「オヤノオン」には

ニノミヤ　キンジラウノ　ウチ　ハ　タイソウ
ビンボウ　デ　アリマシタ。　チチ　ハハ　ハ
キンジラウ　タチヲ　ソダテルタメニ、イロ・イロ
クラウ　ヲ　シマシタ。

とあり、これでは生まれながらの貧乏ということになってしまいます。中級クラスの家であったことをカットして、没落していった以降の様子を描いています。

２番目の「カウカウ（孝行）」では

ハハ　ハ　シンルキ　ニ　アヅケタ　スエ　ノ　子
ノコト　ヲ　シンパイシテ、ヨル　モ　ヨク　ネマ
センデシタ。キンジラウハ　ハハ　ニ　ネガッテ、
オトウト　ヲ　ヨビモドシテ　モラヒマシタ。

となっています。これは、父が亡くなった以降の話です。母は３人の子を育てることができなかったため、赤ん坊の富次郎を親戚に預けました。金次郎は、母の心配そうな様子を推し量り、自分が頑張るから全員で生活をしようと申し出た時の様子を示しています。

３番目の「キャウダイ　ナカヨクセヨ」に

キンジラウ　ハ　アサ　ハヤク　カラ　ヨルオソク
マデ　ヤスマズ　ニ　ハタライテ、フタリ　ノ
オトウト　ヲ　ヤシナヒ　マシタ。

とあります。金次郎が母を助けて働き、２人の弟を養っていたことを表しています。

4番目の「シゴト　ニ　ハゲメ」では

キンジラウ　ハ　十二　ノ　トキ、川ブシン　ニ　デマシタ。ホカ　ノ　人　タチ　ノ　セワ　ニ　ナリマス　カラ、ワラヂ　ヲ　ツクツテ　キテ　ソノ　人人　ニ　オクリマシタ。

とあり、洪水で流された堤防の復旧工事に、金次郎は父の代理として働いた時の話です。12歳であったため思うように働けず、せめて皆の役に立ちたいとして、草鞋を作って持って行き、切れた人に使ってもらった様子（草鞋推譲）が描かれています。

5番目は「シンルキ（親類）」に引き取られる部分です。

キンジラウ　ガ　十六　ノ　トキ　ハハ　モ　シニマシタ。シンルキ　ノ　人　タチ　ガ　サウダンシテ、キンジラウト　二人　ノ　オトウト　ヲ　ワケテ　アヅカル　コト　ニ　シマシタ。

これは兄弟別々となり、二宮家を出ていかなければならなくなった時のことです。しかし、金次郎は「一家再興」をめざし、せめて兄弟だけでも仲良く一緒に暮らしたいと心に誓い、そのためには学問が必要であると考えていました。

6番目の「ガクモン」は、それを示しています。

ヲジ　ハ「本ヲ　ヨム　ヨリ　ウチノ　シゴト　ヲ　スルガ　ヨイ。」ト　イヒマス　カラ、キンジラウ　ハ　ヨル　オソク　マデ　シゴト　ヲ　シテ、ソノ　アト　デ　ガクモン　ヲ　シマシタ。

叔父万兵衛に預けられた金次郎は、昼間は農作業をして、夜中に本を読んでいました。しかし、万兵衛は「農民に学問はいらぬ」と考えていた人ですから、そんな暇があるなら仕事をするように言いつけました。そのため、遅くまで夜なべをしてから本を読んだことを描いています。ここまでが少年時代の話です。

7番目はそれ以降の話を大幅にカットして、「キンケン（勤倹）」とまとめてあります。

キンジラウ　ハ　モト　ノ　イヘ　ニ　カヘツテキテ、ソノ　アレハテテ　キル　ノ　ヲ　ジブン　デ　ナホシテ　スミマシタ。ソレ　カラ　イツソウ　セイダシテ　ハタラキ、マタ　ケンヤク　ヲ　シテ、ノチ　ニハ　エライ　人　ニ　ナリマシタ。

金次郎の生涯のうち、少年期のみを描き、これからが本番という時に、「ノチ　ニハ　エライ　人　ニ　ナリマシタ」として、彼の一生が大幅にカットされ、一行に片付けられていることが伺えます。

なお、「モト　ノ　イエ」（生家）はすでに解体。売却されていましたから、金次郎は別の中古の家屋を買って、自分の畑に移築したのです。

図1

「教科書」以後の話

教科書に描かれた金次郎は、少年時代の逸話などをもとに、修身用の徳目の部分のみを上げています。ですから、彼が一家を再興した以降については全く触れていなかったことが分かります。では、その後の様子はどのようなものだったのでしょう。

金次郎は、伯父万兵衛の家を出てから田畑を少しずつ買い戻し、25歳ぐらいの時には父利右衛門が持っていた反別に戻っています。普通でしたら、ここで「めでたし」となるのでしょうが、それだけでは飽き足らず、さらに行動を起こす非凡性を発揮しました。

金次郎は、小田原藩家老服部十郎兵衛の家へ若党として入り、武家の実生活を体験しています。そこには、格式や派手な生活のため、借金に苦しむ内情が見えました。同家で4年間働いた後、金次郎は日常生活の中で無駄を省く創意工夫を教え、年間の収支と借金の返済方法を一冊の本にまとめ、同家への置き土産としました。

しかし、この本は活かされず、同家の体質は変わりませんでした。ついに金次郎へ家政整理を頼まなければならない状況にまで陥ってしまいます。金次郎は再三にわたる申し出のため、ついに条件付きで引き受けることにしました。それは、5年間は一切「口出し無用」ということです。

しかし、彼の家政整理は十郎兵衛の江戸勤務など、計画外の出費がかさみ、思うように進みませんでした。ついには金次郎が発案した藩の八朱金（8％の低利資金）拝借により解決するまで、どうにもならない状況にまで陥っていたのです。

藩主大久保忠真は金次郎に対して、酒匂川での表彰以来、斗桝改良の提言、八朱金や五常講の発案など、その財政能力に長けていたことを高く評価し、慢性的な赤字に苦しむ藩の財政を金次郎に依頼してみてはどうだろうか、ということになりました。しかし、重臣の猛反発を招く結果となり、実行されませんでした。

たとえ服部家の家政整理が成功したとしても、十二万石の大名ともなれば、それ以上に格式が重んじられていましたから、当然の結果ともいえます。

忠真は、大久保家の親戚筋にあたる宇津家（旗本）の桜町領（栃木県二宮町）をまず復興させ、その実績を見たうえで、藩の財政再建を頼んでみようと考えたのです。これにはさすがの重臣達も反論できませんでした。なぜなら、藩の役人が何度も桜町復興に向かわせましたが、ことごとく失敗しており、誰がやっても結果は同じであると思われていたからです。

桜町復興の命を受けた金次郎は、藩の役人に召し抱えられたうえで同地へ赴き、10か年計画で建て直しに着手し、これを成し遂げることができたのです。今まで藩の役人は武士の目でしか見ていなかったのですが彼は役人である前に、農民の目で見ていました。その違いが、成功に結びついていったのです。

金次郎の復興事業は「報徳仕法」と呼ばれ、桜町復興の成功を聞きつけた周辺の領主からの依頼が相次ぎ、その事例は小田原領も含め、関東周辺にも及びました。彼の業績は幕府にも知れ渡り、ついには幕府の役人として登用され、最終的には日光神領の復興を手がけ、70歳でこの世を去りました。

今日、金次郎のもう一つの呼び方に「尊徳」があります。これは、彼が幕府の役人に登用され、武士としての名乗りをあげてから用いるようになりました。本来は「タカノリ」ですが、明治になってから音読みをして「ソントク」と呼ばれるようになったのです。

彼の死後、報徳仕法は彼の弟子たちに引き継がれ、明治時代には報徳運動として、全国的に普及していきました。報徳仕法には、「分度」というものがあります。

例えば、皆さんの小遣いを1000円とします。それを全部使えば、貯金することはできません。ところが、1000円のうち700円まで使って、残りの300円を貯金すれば、翌月は1300円使えるわけです。それをまた1000円と考えて700円に抑えて300円を貯金に回します。これを繰り返し少しずつでも実行すれば、自然と小遣いは増えていくことになります。その基準は人により様々で、自分にあった程度に決めることが重要なのです。その基準がいわゆる分度となります。

金次郎は報徳仕法を実行する際、まず領主に分度を決めさせました。いくら仕法を進めても、領主の分度が決まらない限り復興できないからです。分度を守らず、思うように進まなかったのが服部家や小田原藩で、逆に成功したのが相馬藩（福島県）です。

金次郎像のはじまり

富田高慶は金次郎の弟子の一人で、師匠の自伝『報徳記』を書きました。これには「先生は薪取りの行き帰りにも『大学』の書物を懐にして、途中歩きながら声を上げて読み、少しも怠らなかった」とあります。この本は明治13（1880）年に明治天皇に献上され、宮内省版として全国の県知事へ配布され、さらに農商務省版から一般向けのものが出されるようになりました。明治24（1891）年には幸田露伴が少年少女向けの文学書として『二宮尊徳翁』が出されました。この中には、金次郎が薪を背負って歩いている姿が挿絵として描か

れています。それが多くの人々の目に触れていったことは、この本の改訂版が何度となく出されたことからも伺えます。また、この頃から、各商店などの引き札（広告）に金次郎が用いられるようになりました。

金次郎の絵から像へと変わるのは、同43（1910）年に鋳金家岡崎雪聲が机上用として銅像を作りました。この作品は東京彫工会に出品され、明治天皇が購入したことから、天皇お買い上げの品として広く知られるようになりました。

金次郎が小学校へ建てられたのは、大正13（1924）年の前芝小学校（愛知県）が最初でした。これは、負薪読書ではなく、ビク（荷物を入れるカゴ）を背負っているのが特長です。

負薪読書としては、昭和3（1928）年、小田原の報徳二宮神社はじめ、神戸周辺の小学校に金次郎像が建てられました。これは、兵庫県の県会議員中村直吉夫人が、長年髪結銭を節約して貯めたお金をもとに寄贈したものです。これが当時の美談として、新聞や雑誌に大きく取り上げられました。

これ以降、金次郎像を小学校に建てようという動きが出てくるようになり、銅像や石像業者の盛んなＰＲもあってか、一種のブームのように拡大していきました。そのピークは、同11（1936）年前後となります。

戦前には、日本の植民地であった台湾や朝鮮にも金次郎像が建てられていきました。その数は、今では把握しきれませんが、おそらく何百体、何千体という数で生産されていたようです。

銅像の場合は鋳型がありますから、型に銅を流し込めば大量生産も可能となりますが、石像の場合は手彫りのため大量生産できず、多くのアルバイトを雇って作った時期もあったそうです。金次郎像のスタイルは決まっていませんでしたから、負薪読書であれば、それでよかったのです。そのせいか、石像はさまざまな表情・スタイルのものが残されています。

金属の供出

今日残されている金次郎像のほとんどは石像です。銅像は戦争により物資が不足し、金属類の供出の対象となりました。供出する時は、「祝出征　二宮金次郎君」と書かれたタスキを掛け、全校生徒の前で壮行会を開催しました。「金次郎でさえ国のために役立っているのだから、みんなも国の役に立つ人間になれ」と、戦意高揚に利用されました。

写真１は同12（1937）年、大磯町の国府小学校に建てられた金次郎像です。本来ならば、これも供出の対象になっていたはずです。ですから、同校に金次郎像が残されているのは大きな謎となっています。

写真１

実物を確認させてもらいましたが、一度取りはずした痕が見られます。供出を免れるために、どこかに隠しておいたものと思われますが、その経緯等については不明です。

これが当時建てられたものであるとすれば、戦前の銅像であり、あの金属供出を免れたことになります。小学校には、戦前の銅像は残されていないといわれていただけに、貴重な歴史の証人であるといえます。

報徳二宮神社の金次郎像は、供出の命令が出された時、同社のご神体であるとして、宮司が体を張って守ったといわれています。それくらい、銅像を残すということは極めて困難な時代だったのです。

供出された金次郎像の後には、台石だけが残されていました。この頃から、供出された金属類の代用品が国策として奨励され、この代用品には、備前焼などの陶像も出回っています。

小学校の金次郎像が戦意高揚に一役買わされたころアメリカは全く別の評価をしていました。明治時代、内村鑑三著『代表的日本人』の中には、二宮金次郎が「農聖」として記され、アメリカに紹介されました。太平洋戦争の末期、戦争終結のため日本へ撒く米軍のビラには、表に成人の似顔絵を、裏には「二宮尊徳は次の様に言っております」として言葉を入れています。同じ時期に全く異なる使い方をされたのは、おそらく二宮金次郎だけでしょう。

今日の金次郎像

戦後、ＧＨＱ（連合国総司令部）は、金次郎を民主的な人物として位置づけていたため、一円札の肖像を承認したり、少年時代のリンカーンと並んで自由を勉強している姿の油絵を書かせています。

このように、戦後は金次郎像が小学校に建てられるということは、戦前ほどではなくなりました。しかし、負薪読書のスタイルは今日でも新聞や雑誌に描かれているのを見かけます。それくらい強烈なイメージとして残されていることがうかがえます。金次郎像のもつ意味は、昔も今も変わらず「子供たちが学校でしっかり勉強してほしい」ということではないでしょうか。

海と山と人と　③

ツバキ科　*Theaceae*

サザンカ　*Camellia Sasanqua* Thunb.

昭和50年４月、町民の公募により大磯町の木として高木ではクロマツが、低木ではサザンカが選ばれました。選定の理由は、クロマツは、東海道の面影を残す松並木のイメージ、サザンカは、家庭の庭木、生け垣のイメージによるものだと思います。今回は、そのうちサザンカについて、少し詳しく述べたいと思います。

園芸植物としてよく知られているサザンカですが、元来、野生種は、日本の四国、九州、本州(山口県)を分布域とし、10月から12月ぐらいに５枚の花びらをもつ白色の花を咲かせます。よく庭先で赤色で重弁のものを見かけますが、それらは、品種改良によって作られたものです。分類上では、ツバキ科に位置付けられ、他にツバキ科でなじみのあるものといえばツバキ（椿）、チャ（茶）などがあげられます。サザンカがツバキの近縁種であることは、葉、花などを見ると何となくでも分かることですが、毎日飲んでいる茶が近縁種であることは、普段、チャの花を見慣れていない方には、不思議に思われるかもしれません。用途としては、観賞用というのが一般的で、その他には、ツバキと同じように実の部分から油が取られ、頭髪油、塗料などに活用されていたようです。近縁種だからといって茶のように葉を乾燥させて飲むといった習慣はなかったようです。

今日では、海外でもよく知られるようになったサザンカですが、始めてヨーロッパで紹介されたのは、18世紀初頭、ドイツ人 エンゲルベルト・ケンペルによってでした。ケンペルは、長崎出島のオランダ商館付医員として来日し、帰国後、著書「廻国奇観」を出版。その中で日本の植物を紹介しています。サザンカは、ツバキの類として記述されています。その後、同じように18世紀末にオランダ商館付医員として来日していたスウェーデン人　カール・ペーテル・チュンベリーが帰国後、執筆した著書「日本植物誌」の中でサザンカに *Camellia Sasanqua* Thunb. としてリンネ式の命名を行い、Thunb.（チュンベリー）という自分の名前を残しています。一方、日本においても江戸時代に「大和本草」、「花壇綱目」、「花壇地錦抄」、「広益地錦抄」といった植物の解説書が出版されており、その中では、野生種の特徴が詳細に書れています。

サザンカの品種改良の歴史を追っていくと日本では、すでに17世紀後期に書かれた「花壇地錦抄」に、50種の品種が紹介されており、そのことからかなり昔から品種改良が行われていたと思われます。現在、日本はもちろんアメリカにおいてもサザンカの品種改良は盛んで、日本から種子を輸入し、栽培、品種改良を行っています。したがって、サザンカの品種は、国内、国外で相当な数があげられます。これほどまでにサザンカの品種改良が進められていたのは、サザンカが比較的大きい花を咲かせるので見栄えがよいということもあるでしょうが、それ以上に晩秋という一年のうちでも開花する花が少ない時期に咲くという特性に注目し、この時期に咲く花をより多く増やそうと試みたことにもよるのではないでしょうか。四季を通じて自分の身近に華やかな色を持つ植物を置いておきたいという願望は、今も昔も変わっていないようです。

大磯町の木　サザンカ

（当館　北水慶一）

参考文献

北村四郎・村田源(1979)：原色日本植物図鑑・本木編Ⅱ.158-161，保育社

北村四郎(1987)：北村四郎選集Ⅲ　植物文化史・243-290，保育社

木村陽二郎(1991)：図説草木名彙辞典．209，柏書房

【表紙写真】

二宮金次郎像

大磯町立国府小学校の金次郎像は昭和１２年に建てられた銅像。なぜ戦時中の金属供出をまぬがれたのか謎がのこる。　（２頁参照）

資料紹介

錦絵『大磯禱龍館之図』と尾上菊五郎

大磯海水浴場は、陸軍軍医総監を歴任した松本順によって明治18年に開設されました。当初の海水浴は、病気治療と健康増進のために提唱されたもので、やがて、鉄道の開通とともに各界の著名人が大挙して押し掛け大磯に別荘を持つことが一種のステイタスともなっていきました。別荘族たちは、次第に自らの生活を持ち込み、東京の一流店舗が大磯に支店を出したり、夏場だけ出店するなど、さながら大磯の小東京化ともいえる現象を生み出しています。当館にも当時の様相を物語る資料が数多く所蔵されています。そのひとつに錦絵があります。錦絵は海水浴客の土産物として、あるいはＰＲの役目を担いながら、明治20年代から明治末にかけて、海水浴を題材にした数多くの錦絵が出回ったようです。

さて、下図は明治24年に刊行された『大磯禱龍館之図』です。これは、海水浴場と禱龍館と呼ばれる旅館を背景に、縞模様の海水着を着た、歌舞伎役者五代目尾上菊五郎がポーズをとっており、肩上には菊五郎自作の小唄を配しています。この錦絵は、過去に町の観光ポスターに利用されるなど、比較的ポピュラーな絵柄として、ご覧になった方も多いことでしょう。

五代目菊五郎（音羽屋、本名寺島清）は、大磯に海水浴場が開かれると、芝居の合間に、たびたび禱龍館に投宿して静養していたようです。このことが評判となり、更に多くの人々の来磯に拍車がかかったとされています。その後、菊五郎は明治32年頃に台町（現在の住居表示は東小磯）1、161番地外に別荘を構えています。菊五郎には、多くのエピソードが伝えられていますが、まさに大磯海水浴場を多くの人々に知らしめたという大きな役割を果たした人物といえるでしょう。

さて、最近当館が収集した資料に「文藝倶楽部」第三巻十一編があります。明治30年８月10日発行のこの雑誌には、巻頭８頁にわたって写真が掲載されておりその中に、やはり時節柄でしょうか、「大磯海水浴」と題した写真が５点掲載されています。そのうち３点は新橋の芸妓の海水着姿、２点が尾上菊五郎、榮三郎の歌舞伎役者の海水着姿です。写真のキャプションには「大磯 遠藤信行氏 撮影」と記載されています。同氏は大磯にあった遠藤写真館の創設者で、明治20年代の古写真には「出張舗大磯警察署前　東京早取寫真師遠藤信行」と書かれており、既にその当時から営業をしていたようです。このことから、おそらく文芸倶楽部に掲載された菊五郎の写真は、菊五郎が別荘を所有する以前、禱龍館滞在中に撮影されたものと思われます。腕組み、半跏趺坐、すました表情、そして、着用している海水着や頭に巻いた手拭いなどから、この写真こそ、まさに錦絵『大磯禱龍館之図』のモデルとなった絵柄として想像するに十分なものといえるでしょう。

（当館　佐川和裕）

『大磯禱龍館之図』（左）と菊五郎の水着姿（右）

秋季特別展『おばあちゃんの針仕事』

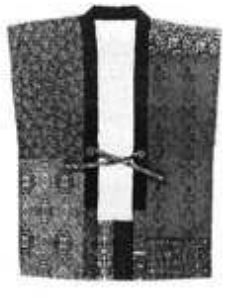
大磯町郷土資料館では、平成８年10月13日から11月17日まで、平成８年度秋季特別展として『おばあちゃんの針仕事』を開催いたします。

昔から、衣服は繰り返して再生されてきました。新調した着物は、何回も洗い張りされて着古され、やがて仕立て直しをされて姿を変えていきました。それは単に倹約するという理由だけではなかったはずです。何度でも仕立て直しができるという和服の特徴はもちろんですが、そのほどいた着物や余り布には、さまざまな思い入れがあります。たとえ、それがやがて擦り切れた雑巾に姿を変えても、当事者にとっての思い出がぎっしりと詰め込まれているのです。だからこそ擦り切れて無くなるまで大切に使われ続けたのでしょう。

今年、満89歳になった畠山キクさん(明治40年生)は、たくさんの衣服や小物を縫い続けてきました。それは、娘を嫁がせる時に持たせるためであったり、孫や曾孫が生まれたためであったり、知人へのお見舞いやお返しであったり、もちろん自分で使うためでもあります。「着るため」「使うため」に作られた衣服や小物の数々は、いずれも家族や親戚、知人のもとで、現在も実際に着用し愛用されているものばかりです。そこには、古くから日本人が育んできた布に対する見方や接し方が見えてきます。

そこで今回の特別展では、昔からの精神を引継ぎ、古着や余り布を利用して、89歳の現在も衣服や小物を縫い続けているおばあさんの針仕事をご紹介します。会期中は、ハンテン、ソデナシ、チャンチャンコなど200点余りを展示します。ぜひご覧ください。

なお、特別展最終日の11月17日（日）には、記念実演会として『機織りの実演』をおこないます。かつては、大磯周辺でも養蚕が盛んだったため、自宅で糸を取って機織りをしたものです。特に、嫁入りまでには自分の着物ぐらいは織れるように躾けられたといいます。しかし、既にその技術を持つ人はほとんどいなくなりました。そこで今回は、相模原市田名在住の大谷タケさんにより、小型機織り機を使ってストールなどを織る実演をしていただきます。実際に機織りを体験していただくこともできますので、ふるってご参加ください。



いずれも古着を利用したドテラ(左)、ハンテン(中)、ソデナシ(右)

【トピックス】

◇アカボウクジラが漂着

去る6月13日午前、国府新宿の海岸にクジラが打ち上げられているとの一報がありました。現場は、二宮町境に近い西湘バイパス下の波打ち際で、大型の海獣が横たわっており、残念ながら既に息絶えていました。一見するとイルカにも似ていましたが、その後の調査で、メスのアカボウクジラと判明しました。成長すると約6mまでになるというアカボウクジラですが、クジラの中では小型で、相模湾では2月から3月にかけて打ち上がる例が多いものの、この時期としては珍しいとのことです。今回漂着したクジラは、体長は5m70cmで、背中やヒレの部分に損傷がひどく、死んでから流れ着いたものと見られています。関係機関の手で実測や写真による記録がなされた後、砂浜に埋められて処分されました。なお、このニュースは、6月14日付の朝日新聞にも掲載されました。

◇子ども歴史教室

本年度の子ども歴史教室は、二宮金次郎をテーマに去る8月7日、8日の2日間おこないました。栢山村(現小田原市栢山)に生まれた金次郎(またの名を尊徳)は、江戸時代に飢饉などに苦しむ農民たちを救済し、農村の復興に尽くした人として知られています。1日目には、報徳博物館の木龍克己学芸員から、『金次郎像の不思議』と題したお話を聞きました。また、2日目には同学芸員の案内のもと、小田原市内の金次郎にかかわる史跡をまわりました。

(前掲講義内容参照)

◇一部展示替え

今年も、常設展示室の小コーナー「歴史を語る品々」の展示替えをおこないました。これは、例年9月に受け入れている博物館実習生の館務実習の一環として実施しているものです。当館では平成2年に初めて実習生を受け入れて以降、展示替えも7回目を数えましたが、今までは「社会生活」、「遊び」、「戦争」、「健康」といった文化的なテーマを取り扱った内容がほとんどでした。しかし、今回は「消えゆく生き物たち」をテーマに、初めて自然分野の展示に挑みました。私たちの生活の向上によってもたらされた自然環境の激変により、生きる場所を追われた、あるいは追われようとしている生き物たちが、近年各方面でクローズアップされていますが、同じような問題は大磯でも他人ごとではありません。そこで、もっと私たちの身近な問題として見つめ直そうとの意図のもと、今回の企画となりました。展示は本館所蔵の剝製や標本、写真パネルなどで構成しています。ささやかな展示コーナーですが、大きな問題意識を持った内容となりました。

【資料の受入】

(寄　贈) ご協力ありがとうございました。

大　磯	佐藤　勇氏	ハゴイタ(潜行板)
大　磯	木村　純子氏	お歯黒道具 他
大　磯	加治　久氏	土器
大　磯	西海　誠氏	ポスト 他
西小磯	小巻　喜義氏	トックリ
西小磯	鈴木　東一氏	ハナ(七夕の飾り)
西小磯	谷久保清彦氏	布見本の布 他
国府本郷	加藤　広美氏	羽子板 他
国府本郷	山口　進氏	掛軸 他
国府新宿	日吉　邦雄氏	和文タイプライター
平塚市	三簾　智子氏	アミ(七夕の飾り)
平塚市	飯田圭太郎氏	須恵器 他(表採)
平塚市	久保田スミ氏	仕事着
平塚市	加藤　春雄氏	羽子板 他
藤沢市	山口　章子氏	神酒ドックリ
愛川町	大塚　博夫氏	虫送り行事写真
寒川町	辻　儀四郎氏	時刻表
東京都	住友石炭鉱業(株)	レンガ 他

(寄　託)

大　磯	宮代　治吉氏	稲荷講資料
大　磯	菊池なつみ氏	文学資料
西小磯	高木とみ子氏	掛軸
西小磯	渡辺　長吉氏	小磯囃子道具
西小磯	戸塚　浩氏	稲荷講資料
西小磯	中村　晴夫氏	稲荷講資料
国府本郷	添田　佐助氏	看板
国府本郷	近藤　俊雄氏	古文書
月　京	後藤　勲氏	古文書
月　京	山川　正氏	書籍
黒　岩	守屋松三郎氏	古文書 他
黒　岩	坂井　保治氏	高札
西小磯東・西区		掛軸 他
西小磯東区		掛軸 他
裡道区		獅子頭
西小磯子ども育成会		会旗 他
大磯中学校		吉田茂杯 他

＊寄託期間　平成８年４月～平成１０年３月

(移　管)

大磯町役場総務部総務課	公図
大磯町役場企画政策室	淡水魚類標本
大磯町立図書館	看板

(採　集)

町内	棟札、古文書
町内	ワラスグリ

【行事案内】

みなさんの参加をお待ちしています。詳しくは町広報をご覧になるか、館へ直接お問い合わせください。

▼特別展

『おばあちゃんの針仕事』

10月13日（日）～11月17日（日）

昔からの精神を引継ぎ、古着や余り布を利用して、89歳の現在も衣服を縫い続けているおばあさんの針仕事をご紹介します。期間中はハンテン、ソデナシ、チャンチャンコなど 200点余を展示します。

▼特別展記念実演会

『機織りの実演』

11月17日（日）　午前11時と午後２時の２回

小型の機織り機を使って、帯やストールなどの小物を織る実演をおこないます。実際に機織り体験をしていただくこともできます。

▼自然観察会

『植物採集と押し葉標本の作成』

（申込制　定員30名）

10月17日（木）・24日（木）・31日（木）

午後１時30分～４時、３日間出席できる方

『木の実を使ってクリスマスリースをつくろう』

（申込制　定員50名）

12月14日（土）・15日（日）

▼資料館講座　（申込制　定員40名）

平成９年２月８日（土）、15日（土）

▼企画展

（仮称）『近代の雑器』

平成９年３月16日（日）～４月20日（日）

Report－大磯町郷土資料館だより－No14
平成８年10月15日
編集発行　大磯町郷土資料館
〒255 神奈川県中郡大磯町西小磯446-1
ＴＥＬ 0463 (61) 4700
ＦＡＸ 0463 (61) 4660